

第 37 回ちば思春期研究会

ちば思春期研究会
事務局長 赤澤宏治

ちば思春期研究会は、2003 年 4 月 29 日、白井將文東邦大学名誉教授と武田敏千葉大学名誉教授によって創設され、新型コロナウイルス感染症での中断を経て、年 2 回の研究会を開催しております。23 年目に入り 37 回を開催することとなりました。しかし、多くの研修会の実績はあるものの、我が研究会への参加者は減少傾向にあります。そこで一人でも多くの方に参加していただくためにハイブリッド開催を検討し始め、第 36 回大会より実施しております。



第 37 回ちば思春期研究会は、2025 年 7 月 21 日(土)千葉市民会館を会場に開催されました。第 23 回でインターネットの光と影をテーマにネット社会の問題点について研修を行い、今回は第 2 弾として闇

バイト、ネット・SNS による性被害、AI 等のネット社会の問題について研修を行いました。

1 テーマ 青少年のサイバーレジリエンス

～生成 AI・メタバース時代におけるリスク
マネジメントと情報教育～

講師 宮崎豊久（インターネットポリシース
ペシャリスト）

2 内容

【1. はじめに】 かつての教育が情報の取得・活用を重視していたのに対し、現代では「情報に晒されること自体がストレス要因」となる場面が増えている。生成 AI や SNS による通知・評価・承認の圧力、メタバース内の人間関係、アルゴリズムによる情報偏在など、子どもたちは絶えず選択と対応を迫られている。

【2. サイバーレジリエンスとは何か】 レジリエンスとは「逆境から立ち直る力」であり、サイバーレジリエンスはこれをデジタル環境に適用した概念である。Center on the Developing Child (Harvard University) は、子どものレジリエンスを支える 5 つの要素を提唱しており、特に「安定した大人との関係」「自己効力感」「適切なコーピング戦略」がデジタルリス

クへの防御因子となる。

【3. 逆境と ACEs (Adverse Childhood Experiences)】 ACEs に含まれる虐待・ネグレクト・家庭内暴力といった要素は、レジリエンスの形成を阻害する重大な要因である。とくに、SNS を通じた嫌がらせや情報拡散は、心理的虐待として機能し、トラウマを再活性化させるリスクを含む。

【4. ストレスコーピングと依存症】 スマホ依存や SNS 依存は、子どもが対人関係の不安や承認欲求へのストレスに対して自己処理しきれず、回避的なコーピングを繰り返す中で形成されやすい。適切なストレス対処法を獲得していない場合、アルゴリズムの強化学習と依存傾向が相乗し、深刻な孤立感を招く。

【5. ハイコンテキスト文化における教育の課題】 日本のようなハイコンテキスト文化では、「察する」ことが重視され、明確な言語化や同意の表明が弱い。これが、性的同意の曖昧さやネット上での人間関係トラブルの温床となる。ローコンテキスト文化に学び、「同意を明文化する」「感情を言語で表現する」教育が求められる。

【6. 予防アプローチと社会構造】 David Finkelhor が提唱した「4 つの壁」理論（加害動機・抑制の欠如・アクセス性・被害者脆弱性）に照らし、個別支援だけでなく、社会全体でのポピュレーションアプローチによる予防が重要である。具体的には、情報教育の早期実施、親子の会話の活性化、SNS 上の異変検知と対応体制の整備が含まれる。

【7. 結論と展望】 本講演では、青少年が直面するデジタル環境におけるレジリエンスの必要性と育成の方向性を示した。生成 AI やメタバースの進展が進む中で、子ども自身が「自らの感情を理解し、環境に働きかける力」を持てるような、文化・社会・教育の在り方を今後さらに再構築していく必要がある。

今後多くの方のご参加をお待ちしております。